

リスク社会時代の児童文学

第五回 マイノリティの存在論的不安

目黒 強



一 はじめに

今回は、性的少数者と発達障害者^①を描いた作品を検討する。性同一性障害特例法や発達障害者支援法が施行されるなどの法的支援が進みつつあるものの、性的少数者と発達障害者は、気づかれにくいことに加え、セーフティーネットが不十分のまま、リスクに直面していると考えられるからだ。

まずは、性的少数者であるが、国立社会保障・人口問題研究所が二〇一九年に実施した調査によれば、レスビアン・ゲイ・バイセクシユアル・トランスジェンダー（体の性別と心の性別が一致しない者もしくは性自認と周囲が期待する性が一致しない者）・アセクシユアル（無性愛者）のいずれかに該当する回答者が三・三%、「決めたくない・決めていない」をあわせると八・二%であったという。性

別主義等に違和をおぼえる人々が少なからず存在していることがわかる。

次に、発達障害（自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、学習障害などの総称）であるが、文部科学省が二〇一二年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」によれば、発達障害の可能性のある児童・生徒が約六・五%の割合で通常学級に在籍しているという。それだけの割合の子どもたちが努力だけでは対処できないリスクに不安をおぼえているのである。

二 性的少数者の存在論的不安

まずは、性的少数者を描いた如月かずさ『カエルの歌姫』（講談社、二〇一一年）を取り上げる。ちなみに、『シンデレラウミウシの彼女』（講談社、二〇一三年）では同性の幼